

2021年5月10日

新年度の決意

園長 児嶋 草次郎

新しい体制のもと新しい年度が始まり、あっという間に1か月が過ぎました。職員たちも子供たちも新たな決意でスタートし、今のところ順調に走り始めています。

4月14日(水)には、高鍋町中央公民館で、石井十次顕彰会主催の石井十次賞贈呈式が行われ、受賞の決まっていた「鳥取こども学園」(鳥取県)の理事長藤野興一先生が出席されました。明治39年創設の鳥取こども学園は「岡山孤児院」とは遠い親戚みたいなもので、私にとってうれしい受賞でした。

理事長の藤野先生は現在80歳です。挨拶の中で、子供たちのため100歳までがんばりたいと話されたのが印象的でした。授賞式の後、個人的に先生と話をさせていただいたのですが、先生はこの5月の全国児童養護施設協議会の会長選挙に再出馬される旨の話をされました。先生は、社会的養護分野において、高校全入運動、園舎の小規模ホーム化、自立援助ホームの設立、心理治療施設の設立等、常に先駆的な事業展開をされ、全国児童養護施設協議会の会長も二期され、私たち下々の者から見れば、思い残すことなどないほどに活躍されて来た方です。先生が会長時代に児童養護施設への国民の関心も集まるようになり、処遇の改善も始まっていました。

ところが、会長を引かれるのを待っていたかのように、「新しい社会的養育ビジョン」(2017.8.2)が厚労省より発表されたのです。先生にとっても信じられない出来事だったようです。2015年に厚労省が15年計画(「家庭的養護推進計画」)を発表した時は会長として参画されているわけだし、それを2年ほどで事前打診もなく反故(ほご)にされたわけですから革命的政策変更で、まさに怒り心頭に発すでしょう。

その後の全国児童養護施設協議会の動きも先生には我慢ならないものであったようです。長い物には巻かれよ的な優柔不断な姿勢に業を煮やしての出馬と受け取りました。政治力のない社会的養護の世界ですが、私も何らかの形で先生を支援しなければと思いました。

私たちは「子どもの未来を守る会」で藤野先生と一緒に活動しています。この活動を地道に続けていくことも、先生の志に添うことになると思います。先生にとって再び会長になることがほんとうの目的ではなく、「施設解体」につながる政策に抵抗し、「日本型社会的養護の構築」を目標に、子供たちの未来をより充実させること、夢や希望の持てる世界にすることが目的であると考えからです。石井十次や鳥取こども学園の創設者尾崎信太郎氏等がそうであったように、民間社会福祉事業者である私たちは、もっと使命感を持ち戦う姿勢を持たねばならないのでしょうか。次の世代の若い実践者たちよ、目覚めてください。今まで十分に貢献して来られた80歳の藤野先生を追いつめ惑わせるようなことになって、ほんとうに申し訳なく思います。本当は50代60代の若きリーダーたちが立ち上がらねばならないのでしょうか。

今年の友愛園の田植えは、4月29日(木)と5月1日(土)に行いました。4月29日は、朝から雨で、雷が鳴り始めるおそれもあり、午後からにしました。

3月2日に種粃(もみ)を水につけ(今年は3月あったかい日が多く、芽も根も伸びすぎましたが)、それを3月21日、蒲鉾型にした苗床に播き土で被い、さらにビニールを被せて苗を育てて来ました。

昭和 20 年石井記念友愛社として再スタートしてから、一度も欠かすことなく続けて来た神聖な行事です。日本では天皇陛下も靱まき・田植をされており、日本人としてのアイデンティティを獲得するための重要な儀式であると位置付けています。

中学 1、2 年生、小学 6 年生等が、保育士や指導員と一緒に手で、苗を苗床からむしり取り、藁（わら）で束ねます。中 3 以上の高校生たちは、投げこまれたそれらを 4、5 本ずつ、代かきを終えヒモを引っぱった水田に測り棒に添って植えていきます。それぞれが一所懸命自分の仕事に取り組んで初めて、全体として田植えは進んでいきます。昔は、どこの村の人たちもみんなで取り組み、共同体意識を作るにおいて大事な村の作業でした。友愛園においても、この年度初めの作業は、職員と子どもたちとの一体感を作るための大事な労作です。半日遅れで始めましたので、2 日間で終わるか心配しましたが、5 月 1 日は朝からみんなががんばり、予定通り終わることができました。そして終了後、みんな「万歳三唱」をしました。

「日本人としてのアイデンティティを獲得する」、「職員と子供の一体感を作る」という目的は、職員が自覚しておればよいことでしょう。私は子供たちには違った目的を提示しています。

5 月 2 日（日）の夜の中・高生たちの反省会の時、また 5 月 5 日（水）の第 I 回の明倫塾の時、私は子供たちに次のように話をしました。

なぜ田植えをするのか。ここは友愛園という施設ですが、みんなにはそれぞれに多少はありますが、普通の家庭に比べて遅れている面（ハンディキャップ）が三つあります。

- ① 親との関係において
- ② 基本的な生活習慣や自己コントロール力が未熟であること
- ③ 心の問題

①親との関係

去年も第 1 回目の明倫塾において同じような話をしました。親元を離れて施設で生活するということは、それぞれに親との関係において、事情があります。親は病身で自分のことで精一杯ということとでここに来た者もいるし、虐待を受けたという者もいます。これから社会に自立するにおいて親から物質的には助けてもらえないという者が多く、また親との距離も考えなければならない者もいて、それぞれに自覚しながら克服していかねばならない。

②基本的な生活習慣や自己コントロール力が未熟であること

親に迷惑をかけてここに来た者もいます。なぜ迷惑をかけるようになったことになったのかそれは生活習慣力や自己コントロール力が未熟で、結果的に学校に行かなくなったり、問題を起こすようになって、親とトラブルになり、一緒に住めなくなったという例がけっこうあります。施設で規則正しい生活をして、この力をしっかり身につけないと、家庭復帰しても社会に自立しても、またトラブルになり落ちこぼれてしまいます。

③心の問題

田植えをする目的は、主にこの心の問題を克服するためです。みんなは施設から学校に通っていることに劣等感を持っていると思う。特に高校生はそうだろうと思う。以前にも話したけど、児童養護施設は、国民の皆様の税金で成り立っている。ここでの生活は、「健康で文化的な最低限度の生活を営む権利」を保障するものではあっても、世の中には色んな考えの人がいて、中には「オレたちの出した税金で養ってやっている」的なことを言うひともいる。

石井記念友愛社には「石井十次の会」という後援会があり、色んな面で守り支えてくださっている。園からの大学進学者のために、奨学金も作ってくださった。支えてくださっている人たちは、みんなが、友愛園で自立のためにしっかり修行していると思ってくださっている。そういう方々の信頼・期待に答えていかねばならない。支援は同情としての支援ではなく、未来への投資として受け取りたい

と思う。

施設で生活しているという劣等感をどう克服するか大きな課題。「自己肯定感」という言葉が施設では多く使われるようになって来た。これは、施設に入ったから発生したというより、家庭から持ち込んだと言ってよい。劣等感も同じ。

普通の家庭で生活している者の中には、親の体が弱くてあまり働けないので、新聞配達をして家計を助けている者もいる。着る物はおさがりで、食事も満足にできないというケースもある。そういう環境に置かれている子供たちも劣等感を持っているだろうし、自己肯定感は低いと思う。しかし、彼らは危機意識を持っているので、はい上がろうという意識が強いらると思う。みんなは、毎日たらふく御飯を食べれたり、着るものも何不自由なく与えられているので、日々何となく流されてしまっている者が多いよね。

劣等感をどう克服するか。確かに国民の皆様の御支援によってこの生活は成り立っているけど、自分たちは自分たちの出来ることは精一杯やっている。朝早く起きて、掃除もキッチンとやり、こうして田んぼや畑で米作ったり野菜作ったりもしている、そういう気概（きがい）を持つことだと思う。田植えをしている時に、その上でみんなであげた鯉のぼりが 150 匹ほど元気に泳いでいたけど、それを見に来た人たちが次々にいたね。あの人たちは、おそらく「わあ！友愛園の子供たちががんばっている！」と感動されたと思う。そう感じた時、その支援は同情ではなく未来への投資となる。そういう相互交流があって、みんなの中にプライド、誇りが育つ、自己肯定感も育つ。将来世のため人のために自分は貢献すると思えば使命感も育つ。

そんな話をしたのですが、子供たちの心にどれだけ響いたかは分かりません。今年度も色んなトラブル・事件があることでしょう。「支援」だけでまだ人格の未熟な子供たちが育つわけでもなく、子供たちの感性と可能性を信じて、こういう「教育」は繰り返していかねばならないのだと思います。

もう一つ、年度初めにあたって、続けさせていただきま。保育園の若い職員たちで、石井記念友愛社の「学生向けのパンフレット」を作ることになり、理事長としての挨拶を書くと、年度末に言われていたのです。ようやくできて、5月上旬に渡すことが出来ました。職員や子供たちにも周知してほしいので、以下にそのまま掲げさせていただきます。

1、理事長として大事にしている考え

石井記念友愛社は、石井十次の名前を掲げて仕事をさせていただいています。石井十次の理念「天は父なり 人は同胞なれば 相信じ相愛すべきこと」から離れていったら、その存在価値を失います。

常にその時代を超越した理念、方針、到達目標をより所としながら、仕事は進めていかねばならないと考えています。

それから、現代は福祉は国が保障するシステムになっていますが、石井十次の時代は、そういう国力はなく、いかに地域の支援者の力を集めるかで、その事業の充実・発展は決まっていた。言わば福祉は、支援の和・輪・環をつなぐ仕事でもあったのです。その精神は今も必要です。

地域の方々、国民の皆様に支えられたサービス業なのだという自覚を持つことで、感謝の気持も湧いて来ます。先人の築いた福祉文化を引き継ぎ、常に地域に生きる人々の支援をも活用し、感謝の気持で、その福祉文化を次の世代に伝えていく、それが大事にすべき基本的考え方です。

2、石井記念友愛社で働く職員に仕事を通してどう育ってほしいか

石井十次は、大正3年、亡くなる時に、周囲の職員や子供たちを集め、こう言ったそうです。一人ひとりが石井十次となって、働いてほしい。つまり、一人ひとりが石井十次の志を引き継ぎ分身となって理想郷作りに邁進してほしいと願ったわけです。一人ひとりがというのは、職員も子供たちもです。

それから 100 年以上の年月がたっていますが、縁あってこの石井記念友愛社で働くことになった職員の

皆様には、やはり、石井十次の思いを引き継ぐくらいの自覚を持って働いていただきたいと思います。

人生色々ですが、「遠き慮（おもんばか）りなければ近き憂いあり」と論語にもあります。それぞれの立場で将来の志と目標をもって努力する、そのような職員であってほしいと思います。そういう姿勢で働いてこそ、結果も出せるし、自分の可能性も伸ばせるのだと思います。自分の可能性に挑戦する人間に成長してほしい。

3、石井記念友愛社のアピールポイント

社会福祉法人も様々ですが、石井記念友愛社のアピールポイントは、やはりまず、石井十次の理念・方針を引き継ぐというところでしょう。時代はどんどんかわっていきませんが、変えてはいけないものもあります。先人たちが築きあげて来た子育て文化・福祉文化が、石井記念友愛社には生きています。特に子育てにおいては、未来の日本を背負っていくわけですし、日本人としての誇りを持った人に養育・教育していきたいと思います。

次に、石井記念友愛社は、乳児院から障がい者施設、お年寄りデイサービスまで人生 100 年を支える社会福祉法人です。常に人生 100 年を考えながら、その支援のあり方を考えていかねばなりません。例えば、保育園の保育士も、小学校に送ったらそれで一件落着くととらえるのではなく、その一人ひとりの子供の人生をイメージしながら、今必要な保育とは何なのかを常に考えるのです。

おかげ様で、石井記念友愛社の各事業は、地域の方々にも高評価されており、これもアピールできる点でしょう。

4、法人としての課題

時代とともに福祉ニーズも変わっていきます。そのニーズの変化に応じてその事業も変わっていかねばなりません。石井記念友愛社も昭和 20 年に石井十次事業を再開して以来、地域のニーズに向き合っているうちに施設の数も 20 以上に増え、その職員も 350 人ほどになっています。

課題も色々ありますが、ここでは 3 点あげます。

① 人材の確保

各施設の世代交代も始まっています。若い人材にどんどん入ってほしいと願っているのですが、少子化でもあり確保が厳しくなって来ています。生きがいやりがいのある仕事であり、将来性のある職場ですので、どんどん挑戦してほしいと思います。

② 法人体制の整備

北は延岡市から南は都城市・高原町まで、施設が分散しています。地域や時代のニーズに答えようと努力した結果です。施設は増えましたが、全体をしっかりと統括するシステムづくりがまだ不十分と言えます。有機的に連携し、包括的に地域に貢献できる体制を整備していかねばなりません。

③ 人材の登用

福祉は人なり。機械相手の仕事ではなく、人、特にまた人格の形成期になる子供たちの保育・養育・教育にあたる仕事は、場合によっては、その子供の人生を決めることにもなり、非常に重要な責任を負います。それだけにやりがいのある仕事でもあります。サラリーマン的に関わるのではなく、人間対人間の関わりでなければなりません。それだけに、努力する職員、志を持つ職員、チーム力を高めようとする職員が評価され、登用される職場作りをめざします。

5、どんな学生・人材を求めるか。就活中の学生人材へのメッセージ

現代の若者の価値観なのかもしれませんが、「転勤は嫌だ」・「街の便利なところへ」など、平穏で安定思考を聞いたりします。

これから世の中がどう変化していくのか。コロナ後、産業構造が大きく変化していく可能性もあります。外国人の流入も今後増えていくでしょう。夫婦共稼ぎがあたり前の世の中になり、女性も将来設計をしっかり立てなければなりません。

石井記念友愛社は、この時代の過渡期にあって、次の時代をしっかりと見すえ、高い志を持ち、積極的に利用者に関わろうとする学生・人材を求めます。